日本文学部会
—概要—

原　山　絵美子*

第７回国際日本学コンソーシアム日本文学部会は、17、18日の２日間にわたり行われた。1日目はティララ先生、キクタさん、施さん、２日目は呉さん、侯さん、范先生、陳先生に、それぞれご講演やご発表をしていただいた。以下に、本部会の内容や質疑応答についての抜粋を報告する。なお、紙面の都合上、すべてを記載できないことをご了承いただきたい。

マルティン・ティララ先生（カレル大学）の「竹取物語に見られる多文化」では、『竹取物語』における、月の都・インド・中国・日本の相対的関係という多文化共生についてご講演いただいた。『竹取物語』には、インドや中国の思想に典拠を持つ不死にかかわるモチーフが繰り返し登場するが、こうした永遠の命を求める道教の思想は、現世への執着を戒め煩悩から離れるべきとする仏教的思想からは批判されており、両立しがたいイデオロギーが物語の中でうまく組み合わされていると説明された。会場からは、こうした思想の複合が『竹取物語』に見られるのはなぜかという質問が出た。先生は、こればかりに理由を求めてはいけないとされつつも、仮名文字は漢文・漢籍から学び摂取したものを自由に組み合わせることができたためであろうと見解を示された。また、かぐや姫の昇天と「来迎図」の類似性について詳細を求められ、『竹取物語絵巻』の昇天の場面との類似性を補足された。

トマーシュ・キクタさん（カレル大学院生）は、「大伴家持の独詠歌におけるメトニミー」という題で発表なさった。「日本人」を他文化に属する人々と考える読者にとって、「文化知識」と「人間の体験」の「メトニミー」の理解が必要であると説明された。たとえば、『万葉集』1037番歌を十全に解釈するためには神道に関する「文化知識」が必要だが、4335番歌の悪天候の描写は、「人間の体験」によって想像し解釈できると述べられた。質疑応答では、二つの「メトニミー」は截然と区別できるのか、1037番歌も「人間の体験」に分類できるのではないかという指摘を受け、他文化知識が必要かどうかを区別の基準としていると答えられた。

施旻さん（本学院生）は、「女性の自伝的作品における追憶の方法」と題し、日本と中国の女性の自伝的古典作品の比較をなさった。日本では、中流の女性たちの文学作品が大量に残っているが、中国では、高貴な女性達の著作がわずかに残るのみであり、文学に分類されるものは更に少ないことを説明された。そして、『蜻蛉日記』の筆者は、自分に近い境遇の女性たちに自らの珍しい身の上を語るが、『金石録後序』の筆者は、男性の士大夫たちに対して『金石録』への自らの貢献を主張している点が異なると述べられた。質疑応答では、日本の「女房」にあたるような、中国の高貴な人々に仕える女性たちは書物を残しているのかという質問に対し、唐の上官婉児や後漢の班昭がそれに該当すると答えられた。

呉勤文さん（国立台湾大学院生）は、「『三四郎』—西洋化社会の中の「迷羊」」で、西洋化社会に

＊お茶の水女子大学大学院院生

おける自己確立の問題、現実や社会認識における自己認識と他者認識のズレによって、三四郎と美禰子の関係は破局に至ったと考察なさった。視点の転換により「迷羊」に対する三四郎の内面認識が空白のままオープンエンディングとなり、語り手は、美禰子との関係性による三四郎の自己確立を全知的視点から冷徹な目で見ているとされた。会場からは、語り手の三四郎への視線について、三四郎と社会とのギャップを描いているのであって、三四郎ではなく社会を批判しているのではないかという意見があった。『野分』の道也先生の描写から広田先生を解釈するこの意見に、二人の世間に対する態度の違いから同様には考えられないと反論され、語り手は「新女性」美禰子と、彼女との関係性によって自己確立をはかった三四郎を批判すると改めて結論付けられた。

侯紀安さん（国立台湾大学院生）は、「日本統治期における女性像の異同」で、日本統治期の台湾で相同する環境や文学的立場である二人の、被植民者と植民者という立場の相異や表現意図の差異が、作品中の女性像にどのように反映されたのかを考察された。そして、西川の重要な女性形象「芸妲」とその豊かな女性幻想について、また龍の理想の女性形象である、悲惨な生活を耐える忍耐力や幸福を追求する自律的な意志を持つが、母性愛や優しさを持ち家庭の責任を忘れない「新しき女性」について説明された。質疑応答では、『稲江冶春詞』(1940年）と『知られざる幸福』(1942年）がどちらも「文芸台湾」に発表されているため、二作品の間に雑誌の編集方針は変わったかどうか質問が出た。候さんは、どちらも日中戦争と重なっていることと、1942年に「日本文学報国会」が設立されるなど皇民化政策が強化されていく時期であることを答えられた。

范淑文先生（国立台湾大学）は、「佐藤春夫文学に見る多文化共生社会」において、ユートピア小説ブームの時期の作品、『美しき町』を取り上げられ、「美しい町」は多文化共生社会として成立するか、また欠如している点は何かを解明された。「美しい町」の六つの住居者資格を検討なさり、結婚の項目、ペットの項目は、共生社会のモットーに背いていると指摘された。そして、「美しい町」は、「中途半端な個の独立性」、「共同体の全体性の欠如」、「不可視な共同体全体の支配者」の点で多文化共生社会として破綻しているとまとめられた。会場からは、『桃花源記』では「桃源郷」を訪れた猟師がそこのことを外で他人に話さないよう戒められるが、比較すると「美しい町」はより開かれたユートピアと考えられるかという質問が出た。先生は、『桃花源記』では猟師が歓迎されており、多文化共生社会として成り立つが、「美しい町」は六つの資格の時点で既に排他的であると答えられた。

陳明姿先生（国立台湾大学）の「多文化社会における文学」では、『今昔物語集』を中心に、日本文学の龍が中国など外国文化の龍といかなる関連を有するかをお話しくださった。中国では、漢に至ると龍の地位が高くなり帝王の象徴とされるが、仏教では、畜生とされるなど地位が低く、前世で罪を犯すと龍に生まれ変わると考えられたと説明された。また、こうした中国の説話や仏教の影響で、『今昔物語集』は多彩な龍のキャラクターがみられるとまとめられた。質疑応答では、漢以前の龍の描かれ方と、漢以降の龍の地位向上の理由を知りたいという要望が出た。先生は、漢以前の龍は天に昇る能力を持つものとして描かれており、漢以降は、帝位に就く人物を定める「天命」を下す「天帝」に謁見するために天に昇る能力が尊ばれ、龍が帝王のイメージと結びつき、地位向上に繋がったことを説明された。

以上のように、共通テーマである「多文化共生社会に向けて」に対して、さまざまな時代、作品、アプローチによって検討が試みられ、大変充実した時間を持つことが出来た。先生方、発表者の皆様、また参加者の皆様に厚く御礼申上げる。